



女性医師支援センター便り

宮城県女性医師支援センター副センター長
 日本医師会女性医師支援委員会委員
 日本医師会女性医師バンクコーディネーター
 宮城県医師会常任理事

高橋 克子

1) 平成27年度日本医師会女性医師支援センター大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会～よりよい男女共同参画を目指して～

昨年12月18日（金）上記連絡会が日医会館大講堂で開催され、約260名の出席だった。大学医学部担当者の連絡会は平成25年度から行われているが、医学会を加えたのは平成26年度からである。このように医師会、大学医学部、医学会と連携を取り、広げたことは大きな意義があると思われる。横倉義武日本医師会長と高久史磨日本医学会長のごあいさつで始まった。日本医師会の女性医師支援事業については笠井英夫常任理事の説明で、平成18年より厚生労働省からの「医師再就業支援事業」を受託、平成19年よりバンク開設、平成21年女性医師支援センター事業と改めた。現在就業実績は447件（就業成立429、再研修紹介18）、医学生・研修医をサポートするための会は年々増え、学会も積極的に開催するようになった。ブロック別会議は6か所で開催され2月には日医会館で情報共有し、意見交換会が開催される予定である。今年は東北ブロックを代表して、私が宮城県女性医師支援事業について発表の予定である。学会総会などへのブース出展は一昨年から行っているが、学会出席の若い医師たちに事業の宣伝と様々な相談に乗っていて、パンフレットなど在庫がなくなるほどの盛況で（約1,700名、昨年夏現在）、医師会組織強化にも一役担っているのではないかと思う。

NO PHOTO

連絡会風景

大学の取り組みとして旭川医科大学教授、山本明美氏は2007年二輪草センターを開設し、復職支援、キャリア支援、子育て・介護支援、病児・病後児保育部門で対応している。ワークライフバランス授業を行い、また大学全体を巻き込んだ子育てとして夏休み冬休みを利用したキッズスクール、子供がいて働き続けるのは普通のことのアピール、イクメンプロジェクトなどユニークな試みをしている。二輪草センターを開設して以来、看護職の退職率も低下し女性の講師も増えたというデータを示した。しかし長時間労働をどう止めるか、妊活支援をどうするか、「鉄は熱いうちに打て」とどう折り合いをつけるかなどの問題点を提示した。

久留米大学医学部病理学講座助教、守屋普久子氏は、男女共同参画事業推進委員会を「元気プロジェクト委員会」と名付け、女性医師の就労支援としてパート医師制度を導入し週1回、2部門で導入した。後程のフロアからの質問により時給3,000円とのことで、会場からブーイングが漏れた。

学会の取り組みとして日本循環器学会は大阪大学保健センター長・教授、瀧原圭子氏が講演した。2005年から学会学術集会のプログラム委員に女性が加わり女性セッションが追加された。2010年学会に男女共同参画委員会が設立され、勤務環境改善のための提言として、産休・育休・

介護休暇中の代替医確保を進める試み、キャリアアップの支援（託児室設置、セミナーを各地で開催、女性座長の増員、女性支部評議員の増員など）を目指している。そして、実際に学会の女性会員も増え、女性発表者、女性座長も確実に増えている。感動的な講演であった。

日本リハビリテーション医学会の取り組みは日本リハビリテーション医学会理事長、昭和大学医学部教授、水間正澄氏の講演であった。女性医師はリハビリテーション科に向いているという。リハビリテーション科女性専門医ネットワークを設立し、研修医・医学生向けセミナーも開催した。「生きる時を、生かす力。リハビリテーション医学」というキャッチフレーズを掲げ結びとした。

その後意見交換を行い、茶話会ではさまざまな方々と、情報交換して閉会となった。

2) 宮城県女性医師支援センター意見交換会～仙台市立病院を訪問して～

暮れも押し迫った12月17日（木）、私たちは新装なった仙台市立病院を訪問した。素晴らしい設備の整った3階第2会議室に通され、山本蒔子宮城県女性医師支援センター委員の司会で、亀山元信仙台市立病院長の歓迎のご挨拶から始まった。櫻井芳明宮城県女性医師支援センター長は「20年位前北欧を旅行したとき飛行機のストライキがあった。その原因は男性にも育児休暇を取らせよということで驚いた。当時の日本では考えられないことであった。男女共同参画推進の世の中になり男性の育児も珍しくない世の中になってほしいものだ」と述べた。私が宮城県女性医師支援センターの平成25年からの活動を紹介し、男女共同参画推進セミナーや医学生・研修医向けのセミナー、県南、県北での意見交換会、市内病院での意見交換会などを紹介した。

NO PHOTO

亀山仙台市立病院長

国立病院機構仙台医療センターの取り組みについては、産婦人科の石垣展子先生（宮城県女性医師支援センター委員）が講演した。仙台医療センターは女性医師が働きやすい環境をつくるために様々な要求をし、それにきちんと管理者が応えてくれている。現在の研修医は、女性医師のほうが多いそうである。短時間正規雇用制度を利用する女性医師はいつも数人いて、子育て中もモチベーションを絶やさず働いている。育児支援も進んでいて院内保育所は定員80名だが希望する人は何人でも受け付け今現在は100名近く受け入れている。空室の病床を利用するなど、病児・病後児保育も対応している。

仙台市立病院診療部小児科医長の新田恩先生は、間もなく産休に入るというお腹を抱えながら、二人目の子育ては困難が待ち構えているが、何とか仕事を続けようという強い意気込みが感じられた。低学年の子供の夜間の受け入れ、学会での託児、相談できる環境整備、キャリアアップのための時間の確保などを提言として述べた。それに対しては、センターとしても着実に環境整備しなければならないと思う。ディスカッションでは、独身や子供がいない女性医師に対する支援は何もなく、子育て中の女性医師の穴埋めをしなければならず、不公平ではないかという意見もあった。仙台市立病院では、平成27年より短時間正規雇用制度を導入したばかりである。常勤女性医師は17%で7年以上働いている女性医師は1人のみである。院内保育は始まったばかりだが、50名の定員で3歳児未満とのことである。市内のある病院でも院内保育所はあるが利用者は数名、それは3歳児までなのでまた保育所を探さなければならない、子供もせっかく慣れたところで変わらなければならないから利用しないという話があった。土日祝日の保育、夜間保育などにも取り組んでいる。相談窓口は総務課で対応したいと事務局からの回答であった。

今回の仙台市立病院訪問は、若い女性医師の仕事に対する熱意が伝わり、意見交換も活発で印象的な会であった。地下鉄までの夜道も、寒さを感じさせない快い興奮を覚えるの帰路であった。